

■教会標語■ 『キリストを証する教会』
主の 2018 年12月 23 日
第99号 クリスマス号

日本キリスト教団
泉ヶ丘教会
牧師 上田 真由美

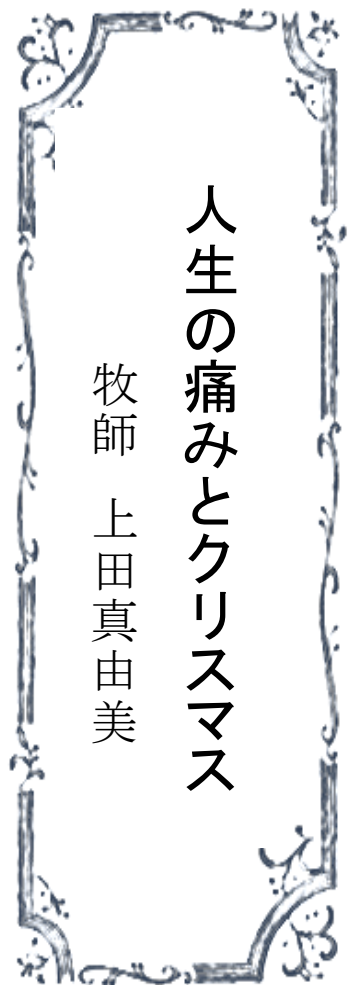
☎590-0114 堺市南区榎塚台 1-1-5
TEL/FAX 072-291-9532
izumigaoka9532church@yahoo.co.jp

■ 礼拝・集会 ■

- ・ 主日礼拝(日)午前10時30分
- ・ 教会学校(日)午前9時
- ・ 聖書を学び祈る会(木)午前 10 時30分
- ・ キリスト教入門講座・家庭集会
- ・ マリア会・テモテ会、他

マリアは、クリスマスに生まれた幼な子
イエス様を連れてエルサレムの神殿に行
きました。するとそこに、 救い主メシア
に会うまでは死ぬことはない(ルカ二・
二十六)とお告げを聖霊から受けて
いたシメオンが立っていました。そして、
彼はその救い主を懐に抱くと、こう賛
美の声をあげたのです。“もう死んでも
かまいません。この目で神の救いを見る
という人生の目的を達成しましたから。
この子はすべての人を救う役目があり
ます!”

それを聞いて田舎娘のマリアは驚いた
ことでしょう。この子にそんな役目が!
と。それと同時に、あのベツレヘムの馬小
屋にやって来た人々がこの子を押んだ
不思議な出来事もこの出来事も、神の



人生の痛みとクリスマス

牧師 上田真由美

と分かってきて嬉しくなったのではないで
しょうか。

御心だ

ところがそのとき、釘をさすようにシ
メオンはこう語ったのです。この幼な子
は、イスラエルの多くの人を倒れさせた
り立ち上がらせたりするために、また
反対を受けるしるしとして、定められて
います。―そして、あなた自身も剣で心
を刺し貫かれるでしょう。―それは多く
の人の心にある思いが、現れるようにな
るためです(ルカ二・三十五)。これはつ
まり、イエス様はすべての人を倒れさせ
る(すべての人は十字架の福音につまず
く)。しかし、イエス様はすべての人を十
字架の死によって立ち上がらせるという
救いの道を開かれた。また、マリア自身
も心を切り裂かれるような苦しみ(死

の苦しみ)にあう。そのことはマリアだけでは無いのだ。すべての人もまた、神様に對して見当違いな思い(罪)が、神の御前に出されて苦しむのだということ。恐ろしい預言ですが、クリスマスに、神様が預言者を通してマリアにお語りになつたことはそのことだったので。

それでは、神様に對する見当違いな思い(罪)が剣で刺されて神の御前に出される痛み苦しみを経験することによつて、マリアは何を知り、どうなつたのでしょうか。その後の人生を見てみたいと思います。

まず、こう書いてあります。イエスの母と兄弟たちが来て外に立ち、人をやつてイエスを呼ばせた。大勢の人が、イエスの周りに座っていた。『御覽なさい。母上と兄弟姉妹方が外であなただを捜しておられます』と知らされると、イエスは、『私の母、私の兄弟とは誰か』と答え、周りに座っている人々を見回して言われた。『覓なさい。ここに私の母、私の兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、私の兄弟、姉妹、また母なのだ』(マルコ三・三十一―三十五)。大工であつたイエスが群衆の前で神の言葉を語るのですから、気が変になつた』と言われたの

でしょう(マルコ三・二十一)。そのうわさを聞いた母マリアは心を痛めナザレから出て来て、人をやつてイエスを『呼ばせた』のです。普段一緒に暮らすイエス様はお優しくあつたでしょうから、自分が呼ばばすぐに来てくれると思ひ、『呼ばせた』のでしよう。この母心、分かる気がします。

しかし『呼ばせた』というマリアの行為とイエス様の答えは正反対です。という事は、マリアの行為は問題がある、神の御心が分かつていない、ということになります。イエス様は、おそらく半ばほほえましく思ひ、半ばあきれておられたことでしょう。そしてこうお答えになつたのです。“あなたと私は何の関係があるか。ここに居る、御言葉に聞き従う人を見なさい。この人こそ私の母なのだ”。こんな突き放したようなことを言われると思ひていなかったでしょうから、このときまさに剣で心を刺されたような痛みを経験したことでしょう。しかし、マリアを本当の救いへと導くために言わなければならぬことだったので。

その後もイエス様はともにお優しくあつたでしょうが、神に對するマリアの見当違いな思い(罪)に對しては、同じような

関わりをなさつたことでしょう。その度にマリアはとも心痛めたことでしょうが、主の言葉を受け入れ、それに聞き従う生活をしていくことによって、神の本当の御心が、罪とそれ以上に本当の救いというもの、分かるようになったのです。そういう意味で、神の御子イエスの母ということよりもマリアは本当に祝福された人だと言えるでしょう。

イエス様との関係の中で、心変えられ、救いというもの、分かるようになったマリアを見てみたいと思ひます。イエス様が十字架におつきになつたときのこと、こう書いてあります。イエスの十字架のそばには、その母と母の姉妹、クロパの妻マリアとマグダラのマリアとが立つていた(ヨハネ十九・二十五)。男の弟子たちは逃げ、数人の婦人だけが十字架のそばにいたのですが、その中で最初に登場するのがマリアです。このときのマリアの心境というのは、まさに「心を切り裂かれるような苦しみ(死の苦しみ)にあう」ものであつたでしょう。息子であり主であるイエス様が十字架上で血を流して息を引き取るのを、ただ佇んで忍ぶしかないので。何もしてあげ

られないのですから。

この出来事も神の御心と受けとめながらも弱っているマリアのことは、周りの人々が気になっていきます。また、弱いながらもマリア自身、確かに変えられているのです。イエス様の復活後に弟子たちが集まったときのことです。彼らは皆、婦人たち、特にイエスの母マリア、およびイエスの兄弟たちと共に心を合わせて祈りをしていた(使徒一・十四)。皆はマリアのことが気になっていた。だから、

特に「イエスの母マリア」がここに、つまり主の死と復活の後にも主の群れの中に、祈りの共同体の中に、一人のキリスト信者として信仰生活をしていたということです。イエス様が十字架の死を遂げた最後の最後まで間近にいたマリアにとつては、十字架の福音こそが自分の拠り所、十字架こそがすべての人の救いの根拠だとよく分かったのではないのでしょうか。

神の御心は、私たち一人一人もまた、イエス様との関係の中で心変えられ、イエス様の群れの中で御言葉に聞き従い、十字架の福音に依り頼んで祈りの生活に励んでいくこと、本当の救いが分かち合っていることなのです。